

「先生は水着えっちとお風呂えっち、両方好き。  
だからこうしてみた。……どう？ 嬉しい？」

シロコは自信ありげに腰を動かしながら、  
私の反応を確かめるように視線を送ってくる。

彼女は私の好みをよく知っている。

実際、彼女の言う通りだ。  
この組み合わせはいつも以上に熱くなる。

「ふふっ……先生の顔、すごくいい。正解だったみたい」

シロコは満足そうに小さく息を吐いた。  
腰の動きを止めないまま、当たり前のように続ける。



「……ん、ちょっと待って」

シロコはそう言うと、  
両肩のストラップをゆっくりと下ろす。

水着の上半分がずり落ち、  
白い胸が湯気の中に露わになった。

「先生、これ好きでしょ？ ……ん、ほら」

当然のようにそう言い、  
私の頭を胸に引き寄せてくる。

私は迷わず顔を埋め、  
唇で乳首を捉え、軽く吸い込む。

「んっ……あっ……」

吸うたびに、彼女の膣内がきゅうつと締まる。

射精感が、一気に下半身に  
集まってくるのがわかった。



私の限界が近いのを感じ取ったのか、シロコが腰を浮かせ、イチモツをぬぷりと抜いた。体をひねり、尻を私に向けて差し出す。

「先生は、おっぱいよりこっちの方が好き。……知ってる」

当然のようにそう言いながら、シロコは自分から腰を後ろに下げてくる。

ぬぷっ……と、再び奥まで咥え込んだ。

後ろから見る、水着に食い込んだ尻の形。普段からよく知っているのに、この角度で見ると、射精感が一気に頂点へ跳ね上がる。

びゅるっ……!!

びゅるるっ……!!

熱い精液が、彼女の中に勢いよく注ぎ込まれる。

彼女は腰を密着させたまま、わずかに息を整え、得意げに振り返った。

「……まだ続ける？」

「抜かなくていいよね」

当然のようにそう言い、シロコはゆっくりと腰を動かし始めた。





